

筑後国分寺

—— 久留米市国分町所在推定国分寺跡の調査 ——

福岡県文化財調査報告

第 44 集

19⁷⁰~~69~~

福岡県教育委員会

『筑後国分寺』 福岡県文化財調査報告 第44集 補訂表

ページ	行	誤	正
刊行の ことは	6	感謝いたします。	感謝いたします。
1	15	天保9年	天保12年脱稿
	16	1638年	1938年
	17	『上代文化』	『上代文化』31号、32号、1962年
	25	G1・G2・H	G1・G2・H・F
4	5	約4cm	約14cm
5	7	前掲書I①	前掲書①
	11	範型	范型
	11	一定の方則	一定の法則
	23	同範	同范
	34	範型	范型
6	表	執丸瓦	軒丸瓦
		執平瓦	軒平瓦
7	22	方二町(約2.16m)	方二町
	28	(PLAN.4のI)	(PLAN.4のI)
8	7	各県史蹟名勝天然紀念 物調査報告書	その他、各県史蹟名勝天然 紀念物調査報告書
表紙		1969	1970

筑後国分寺

—— 久留米市国分町所在推定国分寺跡の調査 ——

刊行のことば

この報告書は、本年度福岡県教育委員会が久留米市国分の推定筑後国分寺跡において、公民館建設工事に伴い事前の発掘調査を実施した記録である。従来この地は国分寺跡と推定されていたが、今回の調査によって発見された遺構・遺物がわが国の古代寺院跡研究の資料として活用いただければ幸甚である。

本書の刊行にあたり、ご尽力いただいた地元国分の方々ならびに久留米市教育委員会に深く感謝いたします。

昭和45年3月31日

福岡県教育委員会 教育長

吉 久 勝 美

目 次

I はじめに	1
II 調査の概要	2
III 遺物 1. 土器 2. 瓦類	3
IV むすび	7

図面・図版

PLAN 1	日吉神社境内図
PLAN 2	遺構実測図
PLAN 3	土器実測図
PLAN 4	瓦実測図および拓影
PL. 1	遺構
PL. 2	遺構
PL. 3	土器
PL. 4	土器底部
PL. 5	軒丸瓦・軒平瓦

挿 図

Fig. 1	推定筑後国分寺周辺字図
Fig. 2	北地区Aトレンチ北壁土層図
Fig. 3	青磁器内面の刻印
Fig. 4	土器底部拓影
Fig. 5	日吉神社境内礎石実測図



Fig. 1 推定筑後国分寺周辺字図

I は じ め に

久留米市国分町の日吉神社境内地は、古くから古瓦が出土し、礎石のあるところから、筑後国分僧寺跡と推定されていた。ところが昭和44年4月この地に国分町公民館を建設することになり、公共施設と埋蔵文化財保護との立場から再々にわたり地元と調整をはかったが、地元住民の公民館建設に対する非常に強い希望により、当該地の事前調査をおこなうことになった。調査の実施は4月14日より5月12日の間である。

日吉神社は、久留米市の東南部、国分町大字谷にあるが、この地は東に高良山を擁し、そこに源を発する高良川のつくる扇状地上に占地している。この筑後平野の東側の地域は、古くから文化の中心地とおもわれ、古墳時代においても、藤山町の甲塚古墳、国分町鑑水の石櫃山古墳、二軒茶屋の浦山古墳、御井町の祇園山古墳(方墳)、さらに京町の日輪寺古墳と前方後円墳の系列がたどられる。従ってこの東部地域が国分寺として「人に近ければ則ち薫臭の及ぶ所を欲せず、人に遠ければ則ち衆を勞して帰集することを欲せず」(続紀天平13年)の「好処」に選定されたことも首肯できよう。日吉神社の北に接して大字西村の地は国分尼寺と推定され、さらに北約2kmの合川町大字枝光字阿弥陀に国衙跡が比定され、さらに国分町馬場田には瓦窯跡がある。既往の調査・文献は次のようなものがある。

伊藤常足『太宰管内志』(中) 天保9年 武藤直治「筑後国分寺」『福岡県報3』1927年
三友国五郎「筑後国分寺」『国分寺の研究』下巻 角田文衛編 1638年

鏡山猛「筑後国衙の調査」『上代文化』

国分寺瓦窯(国分町馬場田)の発掘調査

なお、これらの遺物は九州大学文学部、久留米市公民館、さらに地元研究者古賀行雄氏、福田勇夫氏らに保管されている。

さて今回の調査は、その目的からして発掘地域が限定され、極めて小範囲のトレンチ調査にとどまった。調査地区は社殿を中心として便宜上北地区と南地区に分けておこなった。まず北地区において磁北にあわせて東西方向に北Aトレンチを発掘したが、遺構は確認できず表土層中から軒瓦3点を含む瓦類、土器片および寛永通宝3枚を検出した。そして北Aトレンチに直交してG1・G2・H^Fの各トレンチを設定発掘したところG1トレンチの東半部において土器溜りを検出し、土師器、瓦器を出土した。南地区においては、旧公民館建物直下に東西方向の南Aトレンチとそれに直交する南Bトレンチを発掘したが、この建築の際に攪乱され少数の遺物が検出されたにすぎない。この他境内にある礎石のうちで原位置の可能性の強い「国分共有財産碑」の北の礎石を実測した。

以上の調査は、地元国分町の方々のご協力のもとに、県教育庁文化課技師藤井功、横田義章、亀井明徳の3名があたり、横田賢次郎及び九州大学工学部建築学教室山本輝雄の協力をうけた。さらに瓦類の整理は県文化課技師栗原和彦が担当した。また久留米市教委の半田豊、塚本直次、樋口一成の各氏が終始調査および折衝にあたられたことを銘記し深甚の謝意を表す。

II 調査の概要

調査は昭和44年4月14日から5月12日までにわたったが、雨のため実際に発掘作業をしたのは18日間である。発掘調査地域は日吉神社境内の東半部で、西半部の礎石（「国分共有財産碑」の北側）およびかつて福岡教育大学が調査した地区の周辺には及ばなかった。

調査は社殿を中心として北地区と南地区にわけ、7ヶ所のトレンチ調査を行なった。4月15日から28までは主として北地区を、29日から5月6日までは南地区をそれぞれ発掘調査した。

〔北地区〕

ここに磁北直角に東西方向のAトレンチを中心として地区割をおこない、G1・G2・H・Fの各トレンチを設定し発掘調査した。

Aトレンチにおいて表土および暗褐色腐植土に瓦片の散乱状態がみられ、軒丸瓦3、軒平瓦1とともに寛永通宝3枚が発見された。この下層のやや固くしまった暗黄色土はトレンチ西端から11mの範囲でみられ、小Pit(S P1)群を発見したが明確な遺構としてとらえることはできなかった。これに接する土拡(SK2)から近世の土器を発見した。トレンチ東半部は攪乱がはげしく明確な遺構の検出は困難な状態であったが、トレンチ北壁に接して溝状遺構および土拡(S D5)を検出した。

次にAトレンチの北に直交するG1トレンチの東半部で土器溜り(SK7)を検出し、古代終末から中世へかけての土師器皿、椀および瓦器椀を発見し、それらに共伴して南宋代の作と考えられる龍泉窯の青磁片を発見した。またG2トレンチでは、北端から土拡(SK10)を検出し、瓦の多くはこの遺構からの出土である。したがってこの付近に生活跡関係の遺構の存在を推測させたが、発掘後の建物建設との関係で調査面積をこれ以上拡張することができず、不十分な調査にとどまらざるを得なかった。

〔南地区〕

この地区は従来社務所があり、この建物の取り壊しを待って調査をした。建物があった関係で遺構面の攪乱が著しく、良好な遺構の検出は当初より望むべくもなかった。実際発掘をしてみると、Aトレンチ中央部は不規則な一群の落ちこみがみられ、近世の遺物を発見した。しかしトレンチ東半部から南北方向の幅1.2mの溝(SD11)を検出し、Bトレンチから同規模の東西方向の溝(SD13)を検出し、両者は同一の溝と考えられる。この溝中より南宋代の龍泉系の青磁を発見した。

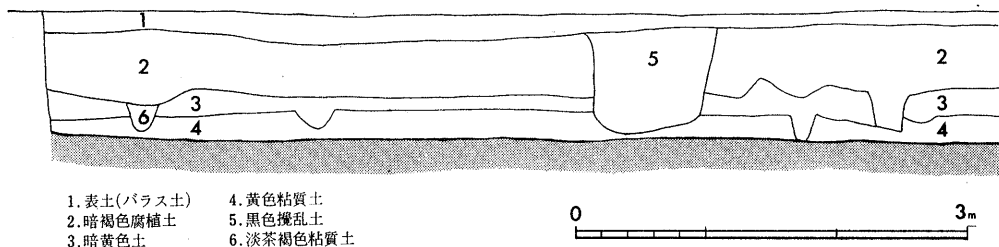


Fig. 2 北地区Aトレンチ北壁土層図

III 遺 物

1. 土 器 (Fig. 4・PLAN 3・PL. 3)

発掘の結果検出した土器には、土師器、瓦器、青磁、それにごくわずかな須恵器小破片、中世の土器がある。以下その概要をのべよう。

土師器

土師器には皿、碗、甕などがある。このうち、皿の大半のものは北地区G1トレンチ (SK7土坑) で検出した。PLAN 3 にみられるように皿はその大きさが、ひじょうにまとまっており技術的にもきわめて画一的である。直径はほとんどが16cm前後で、器高も大部分2.5cmから3cmである。これらの平底の皿には、内面などにロクロ痕かと思われるものや直線的また乱雑なナデなどの痕がついている。したがって多くの皿は器面はかなり滑らかに仕上げられており、ていねいな作りということはできよう。このような画一的な大きさ、製作手法にみとめられるほとんど同一的な作り方と、わすれてはならないのは Fig. 4 に示した拓影にみられるようにその底部における糸切り痕と、おそらくその後についたと思われる簾状の圧痕である。とくに著しいものは PLAN. 3 16 で、この地方のこの種土師器にはわりあい多くみられるものではあろうが、他地方にはあまりみられないと思われるものである。この種の皿は当地方では年代的な幅がかなりあるものと思われる。^①

また PLAN 3 5・14 に図示したものは糸切り後に底部に粘土をはりつけたかと考えられるもので製作技術的ななにかを補った可能性もうかがわれる。^②

PLAN 3 8 に示した高台付皿はこのたびの調査地点とはやや異った地点で以前に発見された。これら皿と碗とはやや相異がみとめられる。それは碗には口縁部 (PLAN 3 9) か底部 (PLAN 3 17・18) に屈曲した部分があることである。なお PLAN 3 9 の碗の底部は平底であるが、皿にみられたような糸切り痕や圧痕はみとめられない。皿とことなりきわめて平坦である。PLAN 3 21 の甕は口縁部をロクロで整形したと思われるが内面はヘラケズリをおこなっている。

瓦 器

瓦器 (PLAN 3 19) は1点出土したのみである。直径は共に検出した土師器に比べるとやや大きく、器高は約6cmと深く、碗である。色は口縁部周辺が黒色で他部分は灰白色を呈している。ふつう瓦器は全体が黒色であり、薄手でかなり堅緻であるが、この瓦器は相当に軟質で厚く作られていて、瓦器としてはやや異様な作りである。また近畿地方の瓦器に特有なヘラミガキもほとんど行なっておらず、このこともこの瓦器を特長づけているとってよいだろう。しかしながら瓦器質であることはたしかで、他のどの土器の範囲にも含まれないものであり瓦器としてみ



Fig. 3 (左)

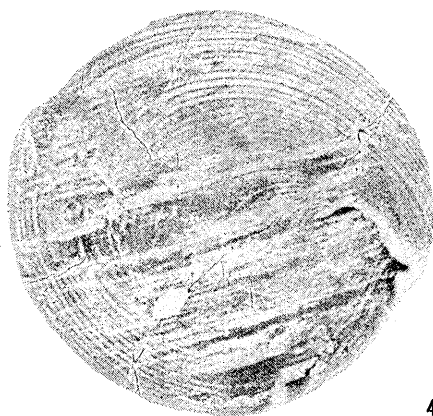
とめざるを得ない。近畿地方を中心に分布する瓦器とはややことなるものであるが、今後次第に資料を増すものと考えられる。^⑤

青磁

青磁は PLAN 3 20・22・23 などである。20・22 は碗であるが、23 の器形は小破片のためによくわからない。青磁としては 特別に大きな器形とはいえ、22 が直径約 14 cm、器高約 7 cm ほどである。20 に示したものは 22 に比較すると高台がやや大きい。特記すべきは、20 の青磁の内面底部には Fig. 3 にみられるような 4 文字がある。「金玉満堂」と読むことができ、これは龍泉窯で作られたと考えてよい。また 22 は外面全体に蓮弁文様が描かれている。これも龍泉窯で作られたと考えられる。^⑥

以上のべた土器類の他に前述した須恵器小破片（おそらく甕かと思われる）や、中世の直径 5 cm 前後の土器があり、この種の土器はすべて堅く、糸切底である。おそらく大量にほとんど同時に作られたものと考えられる。また性格不明の鉄片、寛永通宝も検出した。

- ① この種の土器器皿は福岡県筑紫郡太宰府町などでもかなり多くみられる。太宰府史跡、五条月山遺跡（未発表）、浦城跡（浦城跡調査報告書 福岡県文化財報告45 1970年）
- ② 同類と思えるものが①にあげた五条月山遺跡の出土土器の中にある。ここで製作技術的ななにかを補った可能性と述べたが、たとえば糸切りをした際土器の底部を薄くしすぎたというような可能性を考えてみたわけである。
- ③ 瓦器についての最近のまとまった論文には 稲垣晋也「瓦器碗の成立と展開」『日本歴史考古学論叢 2』（1968年）所収がある。
- ④ 稲垣晋也氏が上出論文の中で西中国地方以西にはないとされている瓦器とは、おそらく近畿地方にみられる、いわゆる瓦器についてであろうと思われる。
- ⑤ これら青磁については小山富士夫氏の御教示によれば、ほぼ南宋期のものとされている。



4



5

Fig. 4 土器底部拓影 (1/2)

2. 瓦 類 (PLAN4・PL.5)

今回出土の瓦類は、トレンチの各場所から出土し、若干の軒瓦を含めてセメント袋30袋ほどの量をみた。このうち、北G2トレンチに出土量が比較的多かったが、土層ないしは遺構との明確な関連は確認されない。また、丸・平の瓦片は整理中であるので今回は軒瓦に限って報告する。

軒丸瓦 (I~II) 出土数は、2種10点である。いずれも『国分寺の研究』^①に詳述されたものであるが若干の観察を加えてみたい。Iは、前掲書Iにあたり、今回の調査では南A・北Hのトレンチから4点が出土した。文様は鴻臚館系の複弁8弁の瓦をモデルにしたかのようなものであるが、瓦当面はやや偏平となり、弁区の間弁も省略された部分がある。この間弁の省略された部分は、4点のうち3点(1点是小破片)までは瓦当の右側同じ位置にあり、軒丸瓦製作時の範型の位置と丸瓦の接合の仕方に一定の方則があったであろうことを思わせた。中房は高く1+4+8の珠文を配し、外区珠文帯には30余の粒子がある。丸瓦を残すものは1点もないが、瓦当面から1cm近くのところに丸瓦の痕があり、瓦当の範型に粘土をつめたあと丸瓦をのせ2cmほどの粘土を盛り上げて接合させている。仕上げは、瓦当裏面は指でなでつけ、側面はヘラで削っている。灰白色から褐色で砂粒を含まず、焼きも堅い。IIは「筑後国分寺」^②3にあたるもので単弁10弁の瓦かと思われる。単弁とのみ判明するもの3点が、南A・北Hトレンチから出土しているが、前掲書3にあたるものとしてまちがいないであろう。Iに比較して瓦当面はさらに偏平となる。中房は1+4+12の珠文を配し、外区珠文帯は30ほどの粒子を配している。焼き・胎土・色調ともにIに近い。なおこのほかに3点の軒丸瓦片が南A・北Aトレンチから出土しているが、文様等は不明である。

軒平瓦 (I~III) 3種11点の出土があった。Iは、北Aトレンチから1点だけ出土している。鴻臚館式と呼ばれるもので4回反転の均整唐草文の瓦である。小破片であるが文様の彫りの深さ、唐草の反転の仕方などから鴻臚館I式と同範であろう。大宰府都府楼の出土例から縄の叩き目をもつ瓦と推察される。瓦の上面および顎の部分はヘラ削りで仕上げられている。茶褐色で砂粒を含まず非常に堅い。IIは「筑後国分寺」^③2にあたる瓦である。南A・北A・Gの各トレンチから1点ずつ出土している。唐草は一本の蔓につながれた均整唐草文であり、外区上縁は珠文帯、下縁は凸鋸歯文帯となっている。この瓦の平瓦の部分は、上面は横方向のヘラ削りが瓦当面から10cmほどのところまで認められるが、下面は縄の叩打文のものと、正方形の格子目文のものと二通りある。どちらも、灰色で砂粒を含まず硬い焼きである。IIIは「筑後国分寺」^④3にあたるもので、今回は北トレンチから6点、南トレンチから2点出土している。文様は、IIと同じ一本の蔓につながれた均整唐草文であるが、IIに比較して子葉の巻込みが弱い。外区は上縁・下縁とも珠文帯である。この瓦は、顎の形で3つに分類できる。すなわち、段顎のもの(A)、曲線顎のもの(B)、平顎のもの(C)となる。この3つは、文様のうえでの差は認めにくいので範型の彫りなおしの関係にあるのかもしれない。平瓦の上面

は、瓦当面に近いところでは横方向のヘラ削りがある。下面は、Aは顎の部分の横の縄目、平瓦の部分は縦の縄目となっている。B・Cは、Aと同様の縄目のものもあるが、縦方向のみの縄目のものもある。灰色から褐色で砂粒を含まず焼きも良い。

以上、出土瓦について略記したが、筑後国分寺出土瓦のごく一部、軒丸瓦2種、軒平瓦3種をのべたにすぎない。しかし、管見に入った資料とあわせても筑後国分寺の出土瓦には、奈良前期のものと奈良後期から平安時代のものとある。このことは、三友国五郎氏がすでに、筑後国分寺の創建の問題と関連して指摘されたことであるが、今回の出土瓦もその論拠に1資料を加えたといえよう。しかし、三友氏は「国分寺址から出た瓦であるが故に新しい瓦であると考えられることは一応吟味されるべきものと思う」とされ、国分寺以前の建物の存在の可能性も考えられるが、これは老司式及び鴻臚館式古瓦の九州における位置づけを各地の発掘例をもとに、明確にすることによって、さらに検討されるべきであろう。

軌丸瓦	全径	中房径	弁区径	外区広	瓦当厚	
I	17.0cm	5.0cm	10.4cm	3.3cm	3.1cm	
II	—	5.3	—	—	3.2	
軌平瓦	瓦当厚	内区厚	上区厚	下区厚	文様の深さ	顎長
I	4.4cm	2.1cm	1.2cm	1.1cm	0.6cm	5.1cm
II	4.7	3.2	0.8	0.7	0.3	7.2
III-A	5.5	3.4	0.9	1.2	0.3	6.9
III-B	4.8	3.3	0.8	0.7	0.3	—
III-C	5.5	3.3	1.0	1.2	0.3	—

今回発見の軒瓦計測表

- ① 三友国五郎「筑後国分寺」『国分寺の研究』下巻 角田文衛編 1938年
- ② 同前
- ③ 小田富士雄「九州における太宰府系古瓦の展開（二）」九州考古学 1957年
- ④ 小田富士雄「九州における太宰府系古瓦の展開（一）」九州考古学 1957年
- ⑤ ①に同じ
- ⑥ ①に同じ

IV む す び

国分寺は聖武天皇が奈良時代の中頃、世情不安定の折から仏教の鎮護国家の思想のもとに、各国に僧寺・尼寺をはじめるとして詔を出したことに由来する。^①

諸国の国分寺の発掘による調査研究は、戦後次第にその数をふやしているが、発掘調査は、それまで成果を上げてきた地上観察や遺物採集では知り得なかった遺構や遺物についての新しい知見を加え、従来の研究成果を批判的に吸収しながら、より正しい歴史上の知識獲得へ向かって科学的な新しい研究段階へ入ったと言える。^②

一般的概念としての国分寺は、寺域については九条家本延喜式裏書の上野国交替帳に記載の同国分寺の「築垣壺廻四面二町長三百二丈一尺」の文献や、条里制の土地区画にうまく合うという考えから二町四方ぐらいいではないかと推定され、伽藍配置については総国分寺としての東大寺の形式をもってその代表的なものとなされてきた感があった。^③

しかるに、近年の発掘調査はこれまで考えられてきた一般的概念の国分寺とは別の要素も各地方において加えられていることがわかってきた。^④

こうした中での筑後国分寺推定所在地の発掘調査ではあったが、発掘区域の限定があり明確なる遺構検出にはいたらなかった。

筑後国分寺の発掘調査報告として、大胆に推測し得る問題点を掲げ、今後の発掘調査研究への手掛りともなれば幸いである。

(1) 石碑北の礎石 (PLAN. 1)

近年姿を現わしたこの礎石 (Fig. 5) は周辺から発見の他の礎石と比較して、より丁寧な加工をしてあることで、主要な建物の礎石と思って間違いない。調査後、1970年3月上旬、この礎石の真北方約40mの位置の溝と推定される遺構中より完形の丸瓦・平瓦が多数出土した。^⑤ 礎石の存在と古瓦の出土によってこの近くに伽藍主要建物の中軸線を考えることができよう。この礎石を中心として方二町 (約216m) を区画すると (Fig. 1 参照) 区画外からの古瓦の出土は今日までのところなく、東側と西側との区画線は今日の南北に走る道路にほぼ一致する。この古瓦出土範囲による推定寺域よりみると、この礎石は中心位置を占めており、金堂か、講堂かの礎石と考えられる。区画線内の東南隅から工事中古瓦が多数出土し、一般的概念の国分寺よりみて塔位置に比定される。かかる推測より今回の発掘の地域は金堂か講堂の東方ということになり、G1トレンチから土師器杯が多数出土したことは生活址関連の遺構の存在を暗示させる。

(2) いわゆる鴻臚館Ⅰの軒平瓦 (PLAN. 4のⅠ)

この軒平瓦は、これまでに筑後国分寺跡出土として報告されていたいわゆる老司系Ⅰの軒平瓦とともに、筑前国分寺・大宰府政庁の発掘調査より検出されたものとまったく同一型とも思われるもので、両者の密接な技術的・文化的関係が指摘される。

最後に、寺域や伽藍構成の推定には多くの推測が含まれるので、地元の方々の注意深い観察と諸賢の今後の調査研究に期待したい。

① この詔勅の記事は

続日本紀 天平十三年（741）三月乙巳（24日）の条に記載されている。類聚三代格は 詔発布の日付を天平十三年二月十四日としている。

② 坪井清足 「近年発掘調査された諸国の国分寺」『仏教芸術71』 1969年

その後播磨国分寺の発掘調査について建築学会にて報告された。

多淵敏樹他 大会学術講演梗概集<計画系> 1969年

③ 三友国五郎 『国分寺の研究』 角田文衛編 1938年発行 各県史蹟名勝天然記念物調査報告書

④ 近年工事中に発見される古瓦の出土については、地元研究者古賀幸雄氏の御示教を受けた。銘記して謝意を表したい。

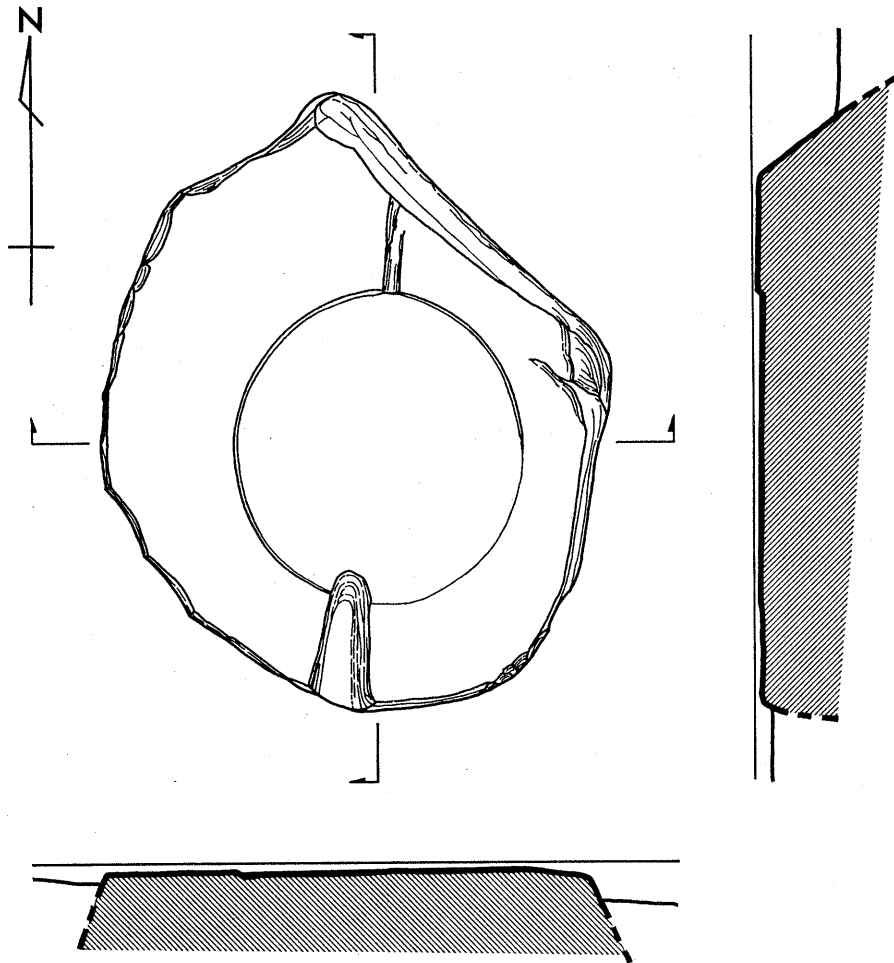
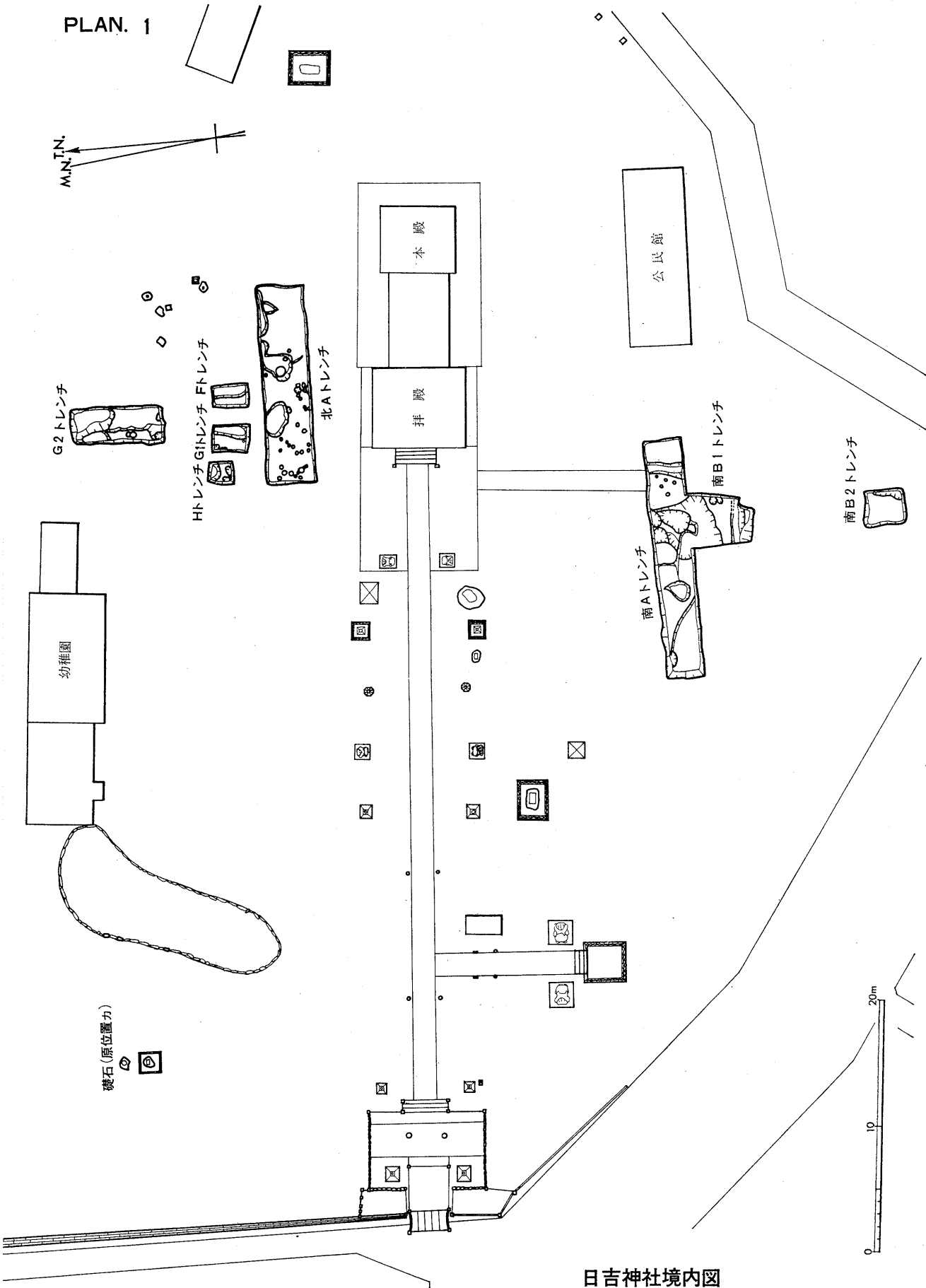
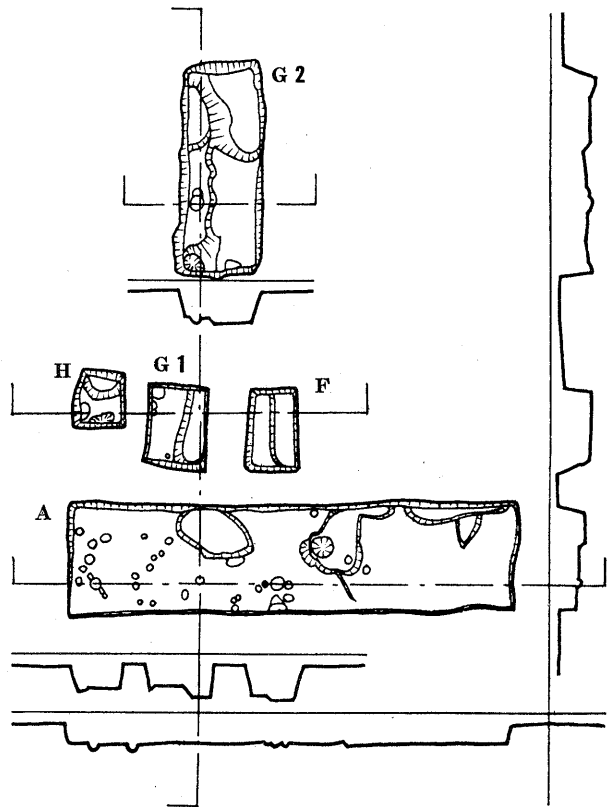


Fig. 5 日吉神社境内礎石実測図

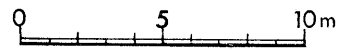
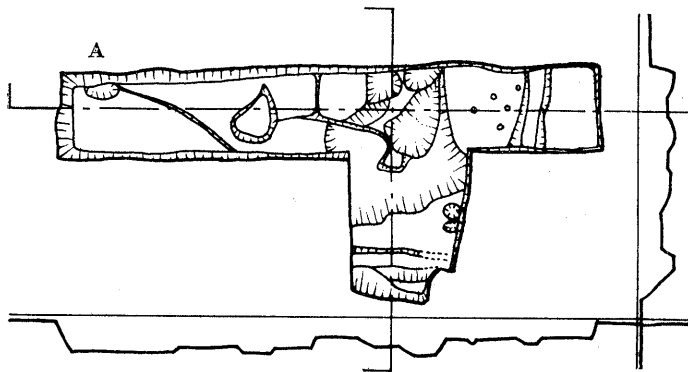


日吉神社境内図

北地区

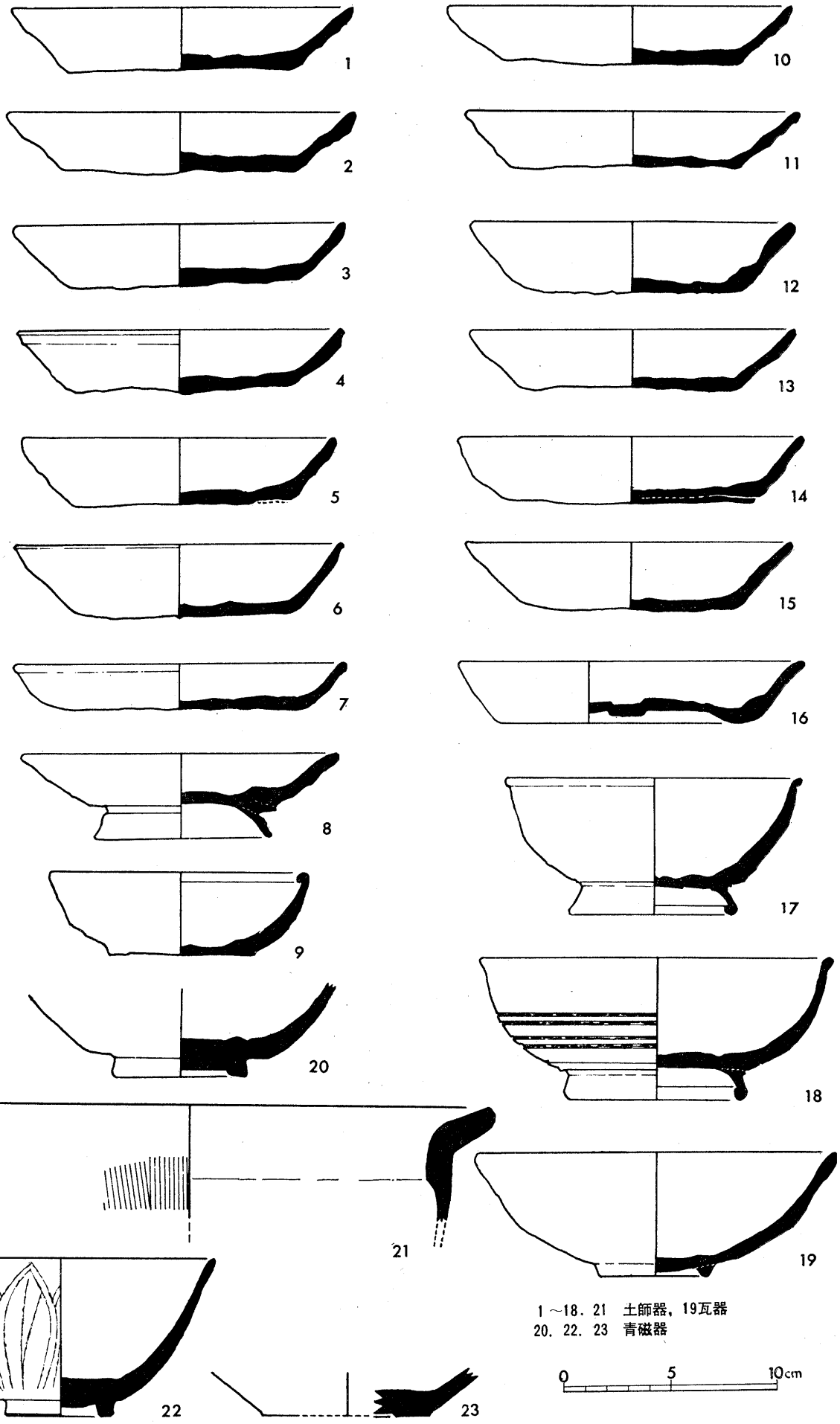


南地区



B

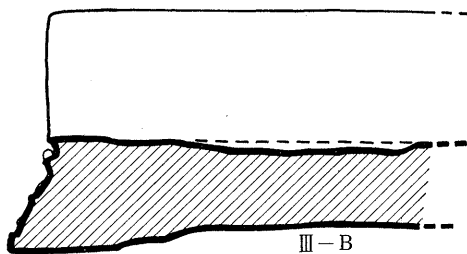
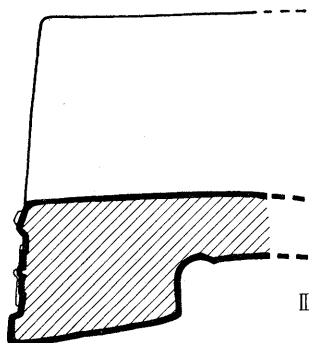
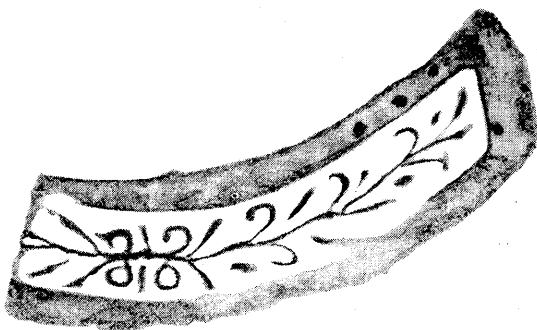
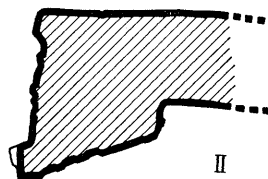
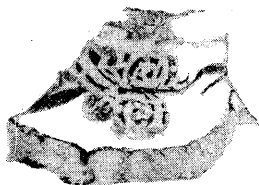
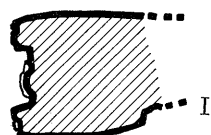
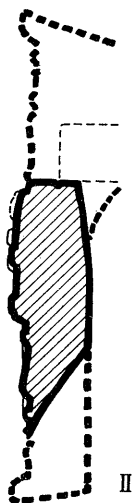
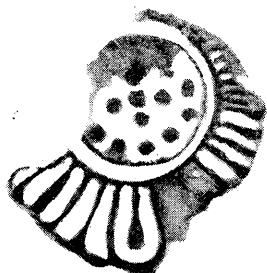
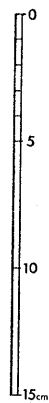
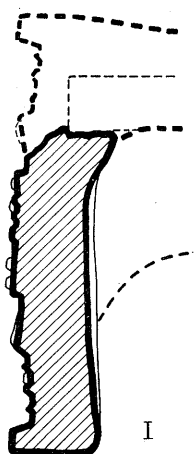
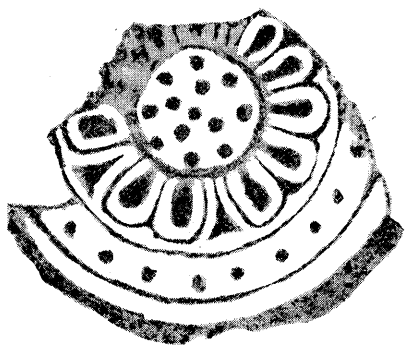




1~18. 21 土師器, 19瓦器
20. 22. 23 青磁器

0 5 10cm

PLAN. 4





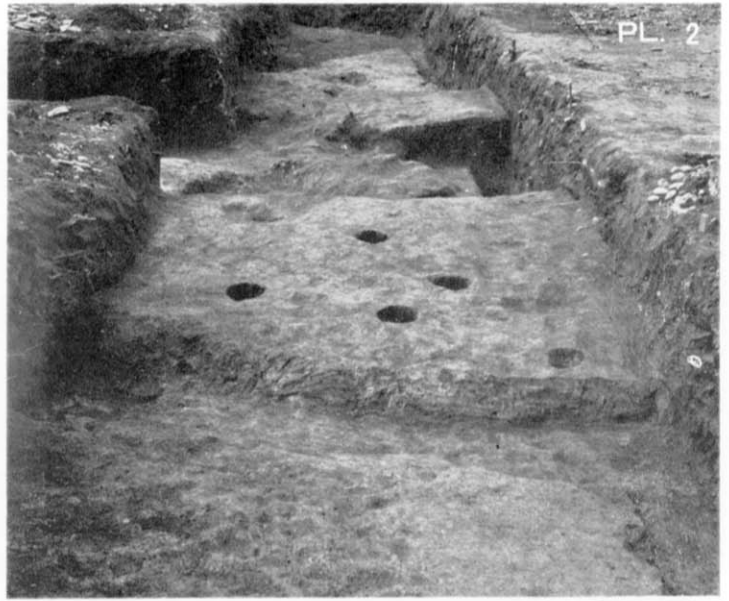
1



2

1. 日吉神社境内・・発掘前・東から

2. 北地区A トレンチ・・東南から



1. 南地区Aトレンチ
東から



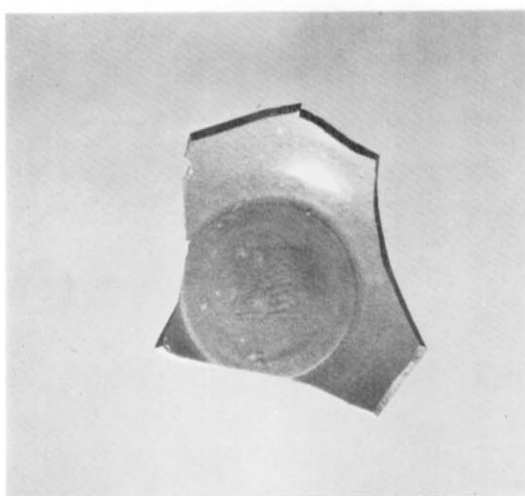
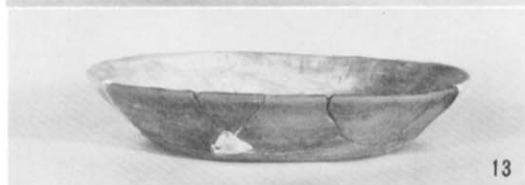
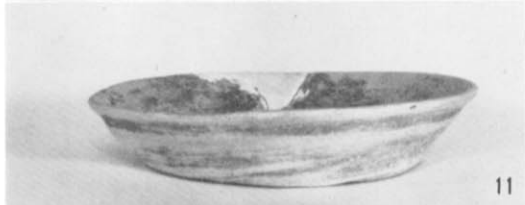
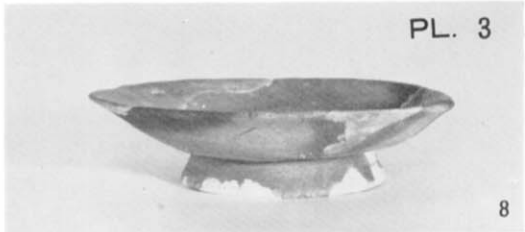
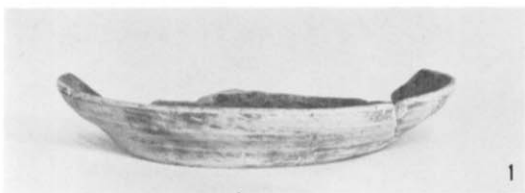
2

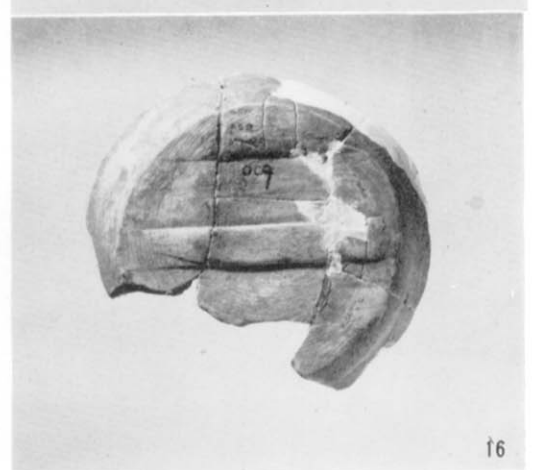
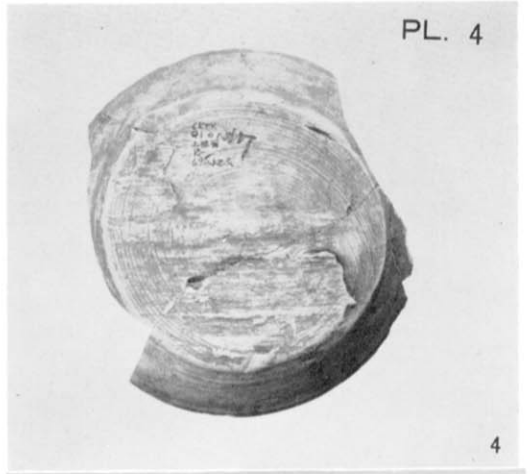
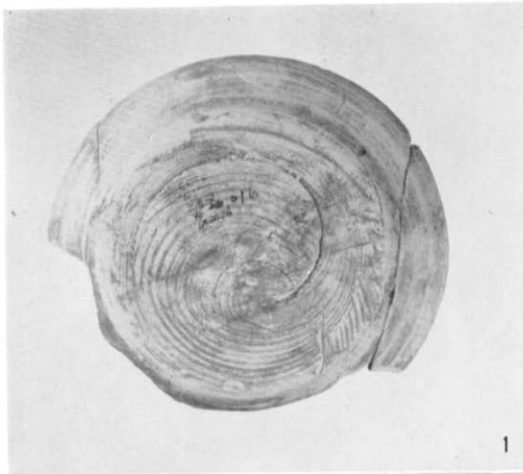


3

2. 北地区G1トレンチ・・西南から

3. 日吉神社境内・礎石





1:3

土器底部



I



I



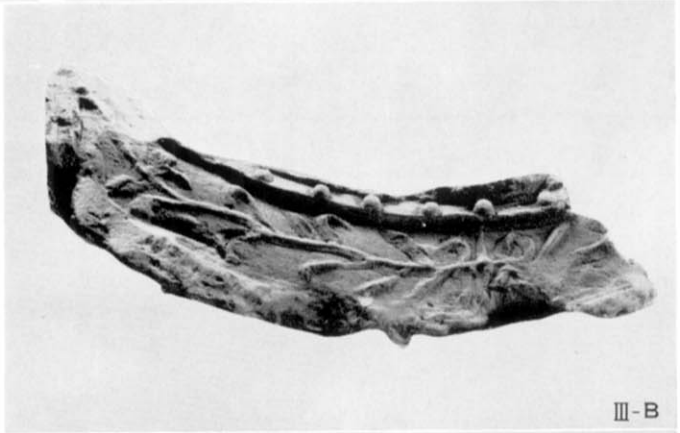
I



III-A



II



III-B



1 : 3

II



III-C

福岡県文化財調査報告 第44集

昭和45年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 正光印刷株式会社

福岡市赤坂1丁目2-21